

# 大槻磐溪のこと

—その略伝と業績について—

庄司 莊 一

一

大槻磐溪（一八〇一—一八七八）は幕末、文化・文政（将軍家斉）から明治にかけて生きた儒者である。蘭学者大槻玄沢の次男、その家庭はオランダ正月（陽曆）を家族と知人で祝う、いわばハイカラな家庭の人として育った。本名清崇<sup>きよたか</sup>。字は士広。通称平次。

父やその友人桂川甫周は、当時隆盛をきわめつつあった蘭学の世界で、オランダ語を正確に訳すためには漢学の素養のある者が必要とする点で意見の一致をみていた。玄沢たちが広く見渡したところ、他の蘭学者たちの二代目には適当な者が見付か

らない。それでは磐溪を漢学者に仕立てようということになり、白羽の矢が彼に立てられたのであった。

彼は幼少にして井上四明、のちに葛西因是・松崎謙堂という儒者に学問を学ぶ。いずれも江戸におけるかなりの学者であった。玄沢の遺著「磐水遺響」をみると、詩・文の世界でもこの玄沢という蘭学者が優れた才能の持ち主であることがわかる。磐溪も後年かの頼山陽に詩文の才を認められていることから、文学者として成長する素質を父から受け継いでいたと言えると思う。

十六歳から約五年、彼は昌平校の生徒となる。学長は八代目林述斎、推薦者は古賀精里。五年目には助手となる。昌平校の教授の卵というところまで、彼の学問は進んだわけである。し

かし、蘭学者の家に生まれた彼は前述のように玄沢の嚆望に沿う生き方が定められており、本人もその覚悟で学問修業に励んだものと見られる。父と昌平校の承諾を得て彼は関西に旅行、約三ヵ月、足を西方にのぼすことになる。

その前に、彼は郷里の一ノ関に墓参を兼ねて旅行しているが、仙台には落学養賢堂をとりしきっている伯父大槻平泉が待ちかまえており、早速藩字の手伝いをさせられ、父玄沢から呼びもどされて、再度仙台には行っているが、結局江戸に腰を据えて学問を続行するよう厳命されている。父親の言によれば、若いうちに集中的に学問を修めておかなければものにならぬ、という。

こうして二十七歳まで彼は江戸で、おそらく昌平校との関係を深めたまますごしたことになる。ここから、さきに一寸ふれた西遊にもどる。彼は書きためた詩文を携えて出かけており、その内容は「寧静閣一集」に残った。

名古屋・京都・大阪・和歌山と、父や師友の縁故のある者を次々と訪ねている。昌平校の先輩・同輩とならんで、父の弟子つまり蘭学者たちにも会っているのが、ふつうの儒者の卵の旅程の中で異彩を放っているといえようか。名古屋では父の弟子の家で、顕微鏡を通して精虫を観察している。「群蟻ノ争ヒ粟ル

ガ如ク、蝓蟻(ぼうふら)ノ浮遊スルニ似タ」精液が平素見なれている西洋の解剖図のままだと感心している。

京都では江馬細香を通じて頼山陽と面会した。この細香とは山陽の女弟子として一流の詩人であり、紹介者としても最も適切な人物であった。山陽は磐溪より二十一歳年長。実は山陽も若き時代に叔父尾藤二洲(いわゆる寛政の三博士の一人であり、朱子学者として二級の人物)の監督の下で、奔放な角を矯めさせられながら昌平校に学んでいる。二人はいわば同門であった。後輩磐溪は昌平校助手時代に出版された「孟子評点」という山陽の著をよんでいた節がある(実は、このことが、私の磐溪研究の過程で最も注目した点であるが、別稿にまっことして、ここでは触れない)。文化、文政、そして天保へと、幕末の文化潤熟期から鎖国が開国か、尊王が佐幕かをめぐって幾多の人材がしのぎを削り、あるいは血を流した疾風怒濤の時代に生きたこの二人には年齢差をこえて相通するものがあつたのである。文人と学者がそれぞれの才能をのびしながら、相互の社会的役割を模索し確認しあつた、その意味では鎖国の枠の中ではあつたけれども自由が享受できた時代だった。山陽は五十一歳で天保の初年に死ぬが、磐溪に会つたのは四十八歳。磐溪は二十七歳。この文化・文政を最も気ままにその文筆を駆使して「日本外史」「日本政記」

「通議」その他によつて文人の霸氣を示した山陽の最も脂の乗つた時に、磐溪は会うチャンスを持ったのであつた。

磐溪の持参した詩文に目を通した山陽は彼を将来見込みのある青年として認め大いに優待した。洛北の花見にもさそわれたし、磐溪が広島で訪ねようとした昌平校の先輩であると同時に山陽の叔父である頼杏坪にも会うことができた。山陽からは草稿「日本外史」の閲説を許可され、自ら読後の所見を述べて山陽に一喝されたが、「日本外史」の構成についての磐溪の意見は山陽に採用されるに至つたのであつた。(磐溪の二子大槻修二・文彦による「磐溪先生事略」による)

磐溪が青年期の成果を携えて行なつた旅行はその著「西遊紀程」に納められているが、その中で交遊の道を開いた各界の人物とのその後の交流が、磐溪という人物を成長させるのに大きな影響を与えたことは察するに難くない。山陽との出会いはその最も大きな収穫の一つであつた。なお、後に試みる長崎遊学では高島秋帆と会つたことが、後年砲術研究に進む際に役立つている。

関西遊学は父の急逝で中断される。彼は父の死に目に会うことは出来なかつた。父の遺命に遵つて漢学者の道をまっしぐらに進んで、ようやくその区切りの時機を迎えたが、今やその成果

を父に報告する暇もなかつた。

ところで、彼は父の死により旅程に組んであつた長崎行きを中断されたのであつた。彼が父の遺命をこれから十全に果して蘭学にも十分の教養を持つとうとすれば、蘭学のわが国における発祥地ともいうべき長崎遊学は是非とも実現しなければならぬ。当時の外国からの唯一の関門こそ長崎であつた。彼は鞆儀を終えてまもなく、昌平校と蘭学界との後援によつて長崎奉行に随行して長崎に赴く機会に恵まれた。その見聞はその著「滯崎雜志」によつて知ることができる。

さて、江戸にもどつた彼の身分は、仙台藩の微々たる下僚であつた。昌平校の教授として立つことは、彼の宿志ではなかつた。彼はあくまで蘭学者との交流によつて、よき翻訳者として成功することを念願してははずである。しかし、父なきあと、蘭学者との密なる交流は絶たれたものではあるまいか。あるいは、以前ほど彼の学問を蘭学の世界で、有効に生かすべきルートが開かれなかつたようにみえる。彼は一介の漢学者として藩内(江戸詰のまま)で雌伏せざるを得ない状況下に立たされた。

その雌伏の間、彼が青年時代から好んだ漢詩・作文の道をも更に深めた実績は「寧静閣一集」によつて確かめることができるが、三十一歳に初稿の成つた「孟子約解」三巻こそは彼の漢

学者としての力量をみるに足る著述ということが出来る。

いま、この著について研究した結果のあらましを記してみよう。

この三巻は「孟子」の前半だけであり、決して完結した著述とはいえない。ただし、彼の經学の方法はこの著によつて十分うかがうことは可能である。

では、この著述はいかなるものか。常識的にいって、それが孟子に関する注釈書であり、その注釈によつて、著者磐溪の經学に関する立場の一端はうかがうことが出来る。

「孟子」を朱子の注(新注)によつて読んでいるが必ずしも朱子を全面的に支持するものではない。いわゆる折衷派の流儀で読んでおる。詳細は別稿で述べるが二三その特色に触れると、三十八歳といえばかなりの実力がついていて当然とはいえず、元・明・清の孟子注釈を大量に読破して取捨ないし自説をつけ加えており、昌平校出身者の中でも注釈者としてひげをとらなれどもと思われる。明儒郝敬の「孟子説解」の諸説を引用して積極的に支持しているのが目立っている。

折衷的方法といつても、「専ら文法ヲ積キテ義理自ラ融クル」場合あり、「数字ヲ嵌挿シテ神理自ラ発スル」場合あり、「新義ヲ述ベ旧説ヲ弁ジテ」考証ニ係ハル者は特ニ之ヲ章後ニ録ス

ル」という。

「約解」と題し「古人ノ説二本ツク者ト雖モ、亦皆混合融會シテ之ヲ出ダシ、必ズシモ某解ハ某説ニ拠ルト記セザルナリ」とことわっている。

このことは何を意味するのか。寛政異学の禁(一七九〇)は「孟子約解」の成つた天保九年(一八三八)を去る約五十年前に相当する。この禁が発動した時期には仁斎・徂徠の学を奉ずる古学派や亀井南暎などの折衷学派に打撃を与えたが、その後は厳しい制約が緩みつつあつた。三十歳以上も年長の昌平校の先輩、たとえば松崎懺堂は考証学者として、佐藤一斎は陽朱陰王の立場ながら学界で盛名をはせていたのである。磐溪が折衷学派的な立場で執筆できたのは、当時の趨勢に沿うたものである。

經書解釈において折衷学派的立場に立つたとはいえず、思想家的側面が磐溪には乏しい。儒学の伝統に呢んだ主張が皆無に近いのはなぜか、という疑問が現在残る。この疑問を解く鍵は彼の經書に対する一般的な姿勢の中にひそんでいる。彼の書翰に「僕ノ所謂窮經トハ末疏小説ニ拘ハルノ謂ニ非ザルナリ。タダ正文ニ就キテ其ノ文脈ノ斷続・語勢ノ緩急ヲ尋釋シ、從ツテ之ガ解ヲナスノ謂ノミ」(加賀藩の儒者大島清太に与えた)とある。また「約解」の序文に「余平生好ンデ(孟子)七篇ヲ説ム

二、唯正文（本文のこと）ヲ取りテ反覆熟誦シ坐臥行住ニモ未ダ嘗テ胸中ニ置カズンバアラス。心会スル所有ルゴトニ、オノツカラ細字ノ注脚、正文ノ上ニ進り出ツル有ルヲ覺ユ」とある。これによると、彼は「孟子」という経書をいわゆる白文で虚心に読んだわけである。文脈の断続・語勢の緩急を尋繹、つまりレトリックに細心の注意をはらって読んだ。内容は二の次か。その答は「専ラ文法ヲ積イテ義理自ラ融ク」であろう。この説書法は重要な語句を摘出（たとえていえば「仁義」「四端」など）して神聖視し無条件に服膺する立場と反対の方法であろう。彼は経書をまず今日という文字として読むのだと宣言しているのである。ここでは詳説を控えるが、彼の注と各章の後に付した解説には、圧倒的に文学的鑑賞といつてよい部分が大半を占めているのである。

このような説書法を採用する理由を、朱子のたとえば「説書ハスベカラク虚心ニ静慮シ文義ニ依傍シ句脈ヲ推尋シ、ホボ今人ノ言語ヲモツテ擬貼シ、一兩字ヲ替換セバ、古人ノ意思ヲ説キ得（理解できる）」（「文集」卷六十二）という語に従ったのだと述べているのは興味深い。彼はこの朱子の語を奉じているところ、まことに昌平校の学徒にふさわしい態度といわなければならぬ。しかし、彼の注釈は全くといつてよいほど朱子のい

わゆる「道学」「理学」から自由なのである。

それでは、彼の経書に対するこの態度は彼独得のものなのか。この「文法」をもつて読むという、いわば修辭学的説書法は、実はそのヒントを先人から得たものである。磐溪には明治元年（六十八歳）に発刊した「古経文視」（上・下）がある。その序文に「余此ノ書ヲ著ス本意ハ、古経ヲ以テ文法ヲ説クニ在ラス、文法ヲ以テ古経ヲ読ムニ在リ。ソレ文法ヲ以テ古経ヲ読メバ、必ズシモ義理ヲ求メザルモ義理ハ文学中ヨリ躍々然トシテ出ツ。コレ我が一家ノ治経ノ法ニシテ得ル所小ニ非ズ、故ニ余ノ論孟ニオケルヤ、経視スレバ解キガタキモ文視スレバ了シ易シ（理解しやす）ノ説アリ。前輩尾藤二洲先生曰ク、初学文章ヲ為ラント欲セバ且ク義理ヲ捨テテ須ラク其ノ字法句法ヲ細観スベシ。字句既ニ明ラカナルヤ、ソノ義理ニ於テ思ヒ半バニ過グト」。これによると、

昌平校時代に教えを受けた尾藤二洲の影響にすることがわかる。更に磐溪は頼山陽に影響を受けたと思われる。山陽にはその没年の二年前に会い、その文才を認められているのだが、（時に磐溪二十七歳、詳しくは彼の「西遊紀程」参照）彼の昌平校で素説手伝文書掛（いわば助手）をしていた十九歳には山陽の「孟子評点」一巻がすでに発刊されている。確証はないが、説書力旺

盛な彼がこの書を読んでいたのではないかと想像される。山陽の「評点」が、その昌平校時代の師であり、同時に伯父でもあった二洲の説書法を継承したと思われる証拠がある。「評点」の序に次のごとく言う。「世儒ハ孟子ヲ經視シテ孟子ヲ文視セス。夫レ未ダソノ文ヲ知ラズシテ、而シテソノ意ヲ得ンコト難キカナ。吾レ孟子ノ文ヲ好ミ、日夕コレヲ読ミ、偶々、心ニ会スルモノ、コレヲ批シコレヲ圈シコレヲ勾截シコレニ評点ヲ加へ、積ミテ一書トナス。敢テ古經ヲ玩弄スルニ非ズ。亦因リテ以テ其ノ意ヲ得ント欲スレバナリ」と。

このように、「孟子約解」は、尾藤二洲・頼山陽を継承して成ったことがわかる。

三十二歳（天保三年）、彼は藩公に見いだされて大番組に加えられ、正式に江戸での学業修業を命ぜられた。この年に結婚。

三十八歳（天保九年）、「孟子約解」成る。つまり、磐溪はこの五、六年学問に集中した。その成果がこの一書として結実したのである。

## 二二

四十歳（天保十一年）、御儒役代りとなり、藩公に御前輪講をし

ている。この頃から、彼は儒者として満足しておらず、ひそかに洋兵に志した。もちろん、藩の許可をとつてのことであるが、四十八歳には大塚同庵から西洋砲術の免許を受け門人に教授を始めている。仙台藩の洋兵への熱は一挙に高まったと伝えられている。

四十九歳（嘉永二年）、この年「献芹微衷」五篇を藩公にたてまつった。これは外交政策に関する献言であり、イギリスは巧猾だがロシアは恩誼にあつい国だから、慎重を待しながら友好を深めるのが得策だという。日本がいたずらに鎖国政策を固執している時代ではないのだ、という世界状況の分析にはじまるこの献言は、時代に警鐘を打ち鳴らしたもので、すでに彼の眼識が単なる儒者の域を脱して広く世界に向けられていることを示している。決して、彼だけがこれだけの広い視野に立っていたのではないが、やはり彼は父の大槻玄沢の血をひいていたことを思わざるを得ない。玄沢はかつて幕府の命令によって「環海異聞」という、海外に漂流した者の口述をとつて、それを世界地図・百科辞書を手掛りに詳細な注釈書を作つたものを献上した。磐溪は世界の知識をかなり身につけている、その上での献策をしているのである。並の儒者から数歩抜kindでた見識をもつていたと想像して差支えないであろう。更に彼は砲術の必

要を早くも感じとっていた。いうまでもなく、将来日本は開国すべきである。それが唯一の日本の安全を期する方法である。日進月歩で砲術も今日の砲術が明日たちに役立つとは彼も思つてはいなかつた。しかし、現在オランダから入手できる最新の砲を操作することができなくて、どうして海防対策が立てられようか、外夷に侮られないだけの軍備をしてこそ対等の外交（開国）が可能なのである。彼は切々とこの事を献策で訴えているのである。

五十三歳（嘉永六年）ペルリ来航の年である。彼は「アメリカ船見届け」を命ぜられ浦賀を往復している。遂に鎖国の夢は破れた。きたるべきものが来た。当時の閣老に磐溪は意見書を提出して開国こそ日本が生きのびる道だと説いている。しかし、幕府だけでなく一部の有識者を除いては鎖国が国是なのだと思ひこもつていた時である。次の詩篇（翌安政元年の作）はその間の微妙な空気を伝えている。

### 春夢篇

米夷来。来幾時。維暮之春以為期。曉煙淡淡收帆影。火輪輾海疾如飛。烽火不揚砲台暗。巨艦已過觀音崎。海門戍士投袂起。爭馳快舸四面圍。回翰有無何遑問。砲声已接海之涯。春煙忽變成毒霧。霧中隱現紅白旗。戰酣誰進火攻策。

幔裏枯柴前後來。東風助勢煙焰漲。万雷声中電光馳。鉄作海城何足恃。銃葉翻為自焚資。檣焦帆爛沈海底。百千魚腹飽浮屍。城中凱歌未及奏。滿船將士呼快哉。行人独誦樊川句。捲土重來未可知。

### （訓詁）

米夷來たる。來たるは幾時ぞ。維れ暮春を期となす。曉煙淡淡として帆影を收む。火輪海に輾りて疾きこと飛ぶがごとし。烽火は揚がらず砲台暗し。巨艦すでに過ぐ觀音崎。海門の戍士袂を投じて起つ。争つて快舸を馳せて四面より圍む。回翰の有無何ぞ問うに遑あらん。砲声すでに接す海の涯。春煙たちまち變じて毒霧となる。霧中に隱現す紅白の旗。戦い酣にして誰か進む火攻の策。幔に枯柴をつつんで前後より來たる。東風勢を助けて煙焰みなざる。万雷声中電光馳す。鉄作の海城も何ぞたのむにたらん。銃葉かえつて自焚の資となる。檣は焦げ帆は爛れて海底に沈む。百千の魚腹浮屍に飽く。城中の凱歌いまだ奏するに及ばざるに。滿船の將士快哉をさけぶ。行人は独り誦す樊川の句。捲土重來いまだ知るべからずと。

きわめて含蓄に富む七言古詩である。最初の數句は頼山陽の「蒙古來」の雄篇に擬している。中段の巨艦群を圍んで快舸を

走らせ火攻めをするところの詩句は「三國志」の赤壁の戦いを模した描写である。後段は晩唐の詩人杜牧の「烏江廟」と「赤壁」を巧みに下敷きにし、また一句(捲土重来……)をそのまま引用している。

杜牧の詩は幻想といい切つてよい側面がある。「烏江廟」では、楚の項羽が垓下の戦いに敗れて烏江まで落ちのびてきたとき、烏江の亭長(村長)が船を用意し、江東に渡つて再挙をはかろうように勧めた。「江東の子弟に豪俊多き」が故に。しかし、項羽は江東の父兄に会わせる顔がないといつて敵陣に斬りこんで壮烈な最後をとげる(「史記」項羽本紀)。そこに詩人の「捲土重来いまだ知るべからず(天下の大勢をあるいは逆転させることができたかも知れぬ)」という詠嘆があつた。また「赤壁」では、この戦いの勝敗を決めたのは、東風であつた。あの時にもし東風が吹かなかつたならば呉の軍隊は一敗地にまみれ、そればかりか孫権と司令官の周瑜二人のそれぞれの美しい妻たち(いわゆる二喬)は魏の曹操に奪われてしまつたであらう(東風が周瑜たちのために都合よく吹かなかつたならば銅雀台の奥深く二人の美姬は閉じこめられてしまつたであらう——東風周郎のために使せずんば、銅雀春深くして二喬を鎖さんと。これらの詩句を連ねて磐溪がいわんとすることは、いたずらに鎖國の夢に閉じこもつてい

てよいであらうかというにある。たとえ、東風(神風ともいいかえてよい)が吹きペルリ艦隊を海底に沈めることができたとしても、それは一場の春夢にすぎない。世界の形勢は日本に開國を迫っているのだ。一國の政治にたずさわる者は現実を直視して善処しなければなるまい。この一篇の詩は警世の響きを伝えているのである。

仙台藩の情報通として磐溪は藩主に注目されていた。また昌平校の第八代の林述斎から歴代の祭酒(校長)は国際状況の分析を磐溪に仰ぐ始末であつた。幕府から外国奉行の一人として、ペルリ接待の役を命ぜられている当主の林復斎に最新の情報を提供すべく、磐溪はその眼で現地を視察している。かの開國論者であり最も外国通で「東洋の道徳、西洋の芸術(科学)」を標榜した佐久間象山とも浦賀の陣屋でめぐりあつている事などエピソードは数多くある。

漢学で鍛えられながら蘭学の素地を生かして大きく成長した磐溪は、今や一藩に仕えるたんなる漢学者磐溪ではなかつた。漢学者の中には少数ながら蘭学をも学んだ者もなくはない。しかし、彼ほど儒学者としての一応の成果をあげながら、一転して幕末の転換期に積極的な言動によつて当局(幕府や藩)を啓蒙誘導した人物はやはり少ない。



年譜を急いで六十歳(万延元年)に繰りあげる。この年、例の威臨丸が出航、日本人のみの操舵による航海がはじめて実現した。磐溪は藩主に嘆願して得た数百両を木村摂津守に渡し、洋書の購入を依頼、こうしてもたらされた中の一冊が原書「ペルリ遠征記」である。そして、藩命を受けて一年半がかりで弟子とともに完成したのが日本語訳の遠征記である。現在、版本が宮城図書館に蔵されている。私はこれを繙いて感慨こもごも至るものがあつた。ペルリが去つてから約十年、彼によつて翻譯は藩公に献上されたのである。この時期としては異常なスピードといえると思う。「彼理紀行」の訳文の序で彼はいう。「ペルリは死を決して開国を迫つた。千載固鎖の國も開かざるを得ぬではないか。時勢なのである。そして彼は機に乗じたのである」と。また、この一書を他山の石として、日本の将来に役立つやうではないかと。それにしても、この序文を讀んで、この一文には外国人の日本觀察がかなりの密度でなされていることを、広く日本人に知らせたいという彼の悲願がこめられていると思つた。

吉田松蔭がペルリの乗艦に接触したくだりを訳しながら、磐溪が何を考えたかに想像を馳せてみたい。是非外国をみたい」との松蔭の願望に対し、もし渡航を許可したならば、いま締結

をみようとしている和親条約をふみにじることになるからとペルリ側は拒絶するわけであるが、そのくだりを磐溪は「提督ハ両生(松蔭とその弟子)ノ主意ヲ聞キ熟々之ヲ勘考シテ両生ニ諭告シテ曰ク、二子ノ志マコトニ感ズルニ堪ヘタリ。二子ノ如キ者ヲ我が合衆國ニ伴ナヒ行カンコト我等ニ於テ実ニ望ム所ナリ。然レドモ、イマ我新タニ日本ト和親ヲ結ビ条約ヲ立タレバ、宜シク信義ヲ守リテ以テ兩國ノ交結ヲ固クスベシ。苟モ信ニ背キテ事ヲ圖ラバ何ヲ以テ人ニ示サン。……此ノ事承諾シガタシ」と訳出している。「この不幸な二人の行動は、同国人の特質より出たものであると信じるし、又人民の抱いている激しい好奇心をこれ以上によく示すものはない。……日本人の志向がかくの如くであるとすれば、この興味ある國の前途は何と味のあるものであることか、又付言すれば、その前途は何と有望であることか」と訳される部分もある(土屋喬雄・玉城肇の邦訳を参照した)。

ペルリという、アメリカ本國から全アジアに対する行動の全權を委任された人物が、松蔭をいかに評価していたか、ひいては日本人をいかに評価していたかを、文久二年(一八六二年)明治元年を去る六年前)の時点において当時の識者に報告しえたということは磐溪にその功の大部分を帰せしめてもよいのでは

あるまいか。

三

六十二歳（文久二年）、実はこの年に磐溪は仙台帰住を命ぜられてゐる。一時は、彼の活躍ぶりが注目されて幕府が召し抱えようとしたが、それを断つた彼であつた。藩主の懐刃であつた彼が仙台に帰されたのは、のちに暗殺された佐久間象山の二の舞いを磐溪にあわせまいとする藩の意向が働いたからであつた。

しかし、仙台に帰つてからの磐溪には幕府を擁護して薩・長と強硬談判を執行するという役割が待つてゐた。時勢は大きく転回しつゝあつた。奥羽二十五藩に北越六藩を加えた三十一藩の奥羽越列藩軍事同盟の理念ともいふべき「五事の建白」を彼は起草した。同盟軍が敗れ、明治元年（磐溪六十八歳）仙台藩は降伏する。死刑を宣告されていたが、親族の奔走、ことに後年、日本最初の国語辞書「言海」の著者として有名な磐溪の次子文彦の身をもつてする嘆願によつて許される。

ふりかえれば、漢学者として昌平校から嚆望された時代、藩の軍事・幕府の外交に才覚をフルに發揮した時代、最後には新

政府と対抗も辞さなかつた時代が続いた。七十一歳（明治四年）から没年の七十八歳（明治十一年）までは、有能な二子（大槻如電・大槻文彦）の庇護のもとで、性来好んだ漢詩文の師として余生を送つた。

文彦は父磐溪から、これは祖父玄沢の誠語であると次の言葉を伝えられた。

「およそ事業はみだりに興すことあるべからず。思ひ定めて興すことあらば、遂げずば止まじ、の精神なかるべからず」と。十七年の星霜をへて文彦は「言海」を脱稿するが、氣力の挫けたときの支柱はこの言葉であると述懐してゐる。玄沢の遺言の子に伝えた磐溪自身、この言葉を再三噛みしめての一生だと言えなくもない。よくその遺録を継いたればこそ、如電・文彦も明治の文運を担う一翼となり得たであらう。松崎傑堂は学者一族として西に頼氏、東に大槻氏あり、と言つた。

清末の大儒俞樾は「東瀛詩選」巻三十二で磐溪の詩を五十五首も採択し「潛廬誦すべし」といい、更に「其の文集を説むに、兼ねて經字に長ぜるを知る。著に孟子約解あり」と述べ、荻生徂徠の「論語微」に、あるいは匹敵するのではないかと激賞している。

以上、大まかに磐溪の伝記を記した。幕末における最も開明

的な儒者・文人としてもっと表彰されて然るべきと思うが、いまだに伝記のままとまったものが紹介されていない。ここに機会を得たことを感謝したい。

参考文献

寧静閣一、二、三、四集

西遊紀程

昨夢時曆

孟子約解

中村真一郎「山陽とその時代」

大島英介「遂げずばやまじ―大槻家の人々―」

高田宏「百葉の海へ」

(昭和六十一・十一・二)

(付記)宮城図書館(大槻文庫)と早稲田大学図書館に特にお世話になった。感謝の意を表します。